

戦後75年

恒久平和を願う 後世に伝えたい わたしの記憶

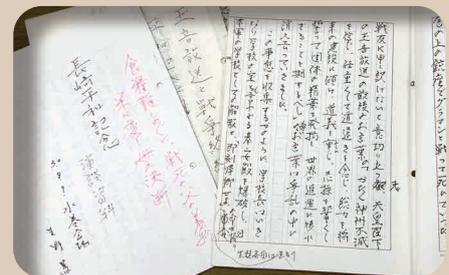
令和2年夏、第二次世界大戦の終戦から75年を迎えます。多くの人に悲惨な記憶と深い悲しみを残した戦争。現代の日本では戦争を知らない世代が総人口の8割を超え、戦争の悲惨さや教訓は歴史の授業やテレビの特集などで知るだけとなりました。人々を苦しめる戦争を二度と起こさないために、戦争の悲惨さや教訓、平和の尊さを次世代に語り継いでいくことが、私たちの重要な使命であると考え、激動の時代を乗り越えてきた人の話を記録することにしました。

戦争中や終戦の取材をすすめるなか、幸町の生野篤さんとの出会い、18歳で終戦を迎えた貴重な体験談を伺うことができましたので紹介します。

また、生野さんは毎年8月、原爆記念日や終戦記念日を平和祈念日とし、犠牲となった亡き戦友の慰霊を行い、戦争体験の講演を行っているそうです。



あつし 生野 篤さん 93歳(幸町)



生野さんの自筆の講演会原稿

暑い暑い真夏の終戦

75年前の昭和20年8月15日、私は神奈川県奈川県の旧陸軍兵器学校にいました。その日、非常召集を掛けられて、全校生徒は校庭に整列集合しました。空には敵機グラマンの姿はなく、私たちを仇(かた)のように扱っていた下士官たちも姿を見せず、今までと何かが違った雰囲気を感じていました。私は腹が減ったのにも気付かず、何が起こったのかとても心配していました。

その時、正午の時報を合図のように、学校長自らが「気を付け」の厳しい号令をかけました。その途端ラジオから天

皇陛下の「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」の戦争終結の玉音放送が流れてきました。天皇陛下の言葉は聞き慣れないもので、放送の内容も意味も理解できない人のためにラジオのアナウンサーの説明があり、日本が無条件降伏をして、敗戦したことを知りました。

私たちはこれまで、大本営発表の「勝った。勝った」という裏宣伝に惑わされ、踊らされていたことを知りました。

生徒の中には天皇陛下の声を信じられず、昂奮(こうふん)に走り本土決戦に動こうとする者、校舎の上の銃座でグラマンと戦って死んでいった戦友に申し訳ないといきり立つ者、泣き崩れる者などがおり、

玉音放送の最後の「国を挙げて一家として団結し、子孫に受け継ぎ、神国日本の不滅を固く信じ、任務は重く道のりは遠いと自覚し、総力を将来の建設のために傾け、踏むべき人の道を外れず、揺るぎない志をしっかりと持って、必ず国のあるべき姿の真価を広く示し、進展する世界の動静には遅れまいとする覚悟を決めなければならない」という尊い言葉は、騒乱の中に消え去っていききました。

※(昭和20年8月15日正午、ラジオで流された昭和天皇の「大東亜戦争終結に関する詔書」の現代語訳：朝日新聞デジタルより引用)

この事態を收拾するかのようには、学校長はいきなり、学校の宝とも言われる奉安殿を爆破しました。そして「即刻帰郷せよ」と学校長から命令が下され、私たちは速やかに父母の元へ帰ることになりました。

帰郷

私たちは追い立てられるように、身の回りの物を持ち、乾パンや冷凍みかんなどの糧食を受け、幌張りの軍用トラックに乗せられ、東京の新橋駅へと移動させられました。新橋駅までの八王子街道を移動途中、トラックから見た東京は、昭和20年3月10日の大空襲で、千代田の森の一部を残し見渡す限り一面が焼け野原になっており、四方八方に伸びた道路の焼け跡が東京の広さを物語っているようでした。その道筋に点々と並んでい

るトタン囲いの簡易火葬場からの鼻を突く臭いは、今でも忘れられません。

新橋駅には、すでに地域別に連結された貨物列車が20〜30車両が用意されていて、私は九州方面行きに乗せられました。私たちを乗せた貨物列車は、翌朝早く原爆の地、広島駅のホームにつきました。駅もホームも全面「むしろ」で囲まれて、被爆跡の焼けた廃墟を見えなくしていました。私たちは水の補給をと水筒を取り出して、ホームの水飲み場に行きましたら、駅員から「水は汚染されていて危ないので次の駅まで我慢するよう」と注意され、そこで初めて原爆の恐ろしさを知りました。

三日がかりの復員貨物列車の旅も故郷への乗換駅久留米を前にして、前日の豪雨の影響を受けた筑後川に架かる鉄橋は列車の通行を止められていました。私は故郷に早く帰りたい一心で、荷物を背負い、濁流を下に見ながら「負けるものか」と鉄橋を歩いて渡り、久留米駅で待っていた列車に乗り、我が故郷の田主丸駅に帰り着きました。そこには、出勤の列車待ちをしていた人たちに混じって私の帰りを待つ母の姿がありました。母は、私が帰郷するという話を聞いてから毎日駅に迎えに来ていたそうです。

私は母の顔を見て直立不動で「生野篤、只今帰りました」と気を付けをし、挙手の敬礼をしました。母は涙ぐみ、無

言のまま私を抱き寄せてくれました。周りの人たちから「無事でよかった。よかった」と拍手をいただきました。

戦後、芦屋へ

帰郷後は、久留米で炭鉱の機械を作る会社に就職しましたが、戦後の電力不足から停電が続いたため仕事にならず、衣食住あらゆるものが不足し、しばらくは苦しい生活が続きました。そんな時、友人に誘われて米軍景気に沸く、米軍芦屋基地の将校クラブに就職。米軍撤退後は、航空自衛隊の防衛庁事務官に採用され、各航空基地を歴任し航空幕僚監部を最後に定年退職しました。

戦争をしないと誓う日

この戦争で軍人、一般人を合わせて310万人もの犠牲者をだしました。戦場となった沖縄戦、原爆が投下された広島、長崎、親兄弟を日本に残し亡くなった人やシベリアで凍死した人、持てるすべてを失い迫害に耐えながら身一つで引き揚げた人たちの想いに応えて、「もう二度と戦争をしないさせない」と誓い合うのが終戦記念日であり、慰霊の日であります。(生野篤)

芦屋町戦没者慰霊塔

中央公園に芦屋町戦没者慰霊塔があるのを知っていますか。それは戦争の名のもとに犠牲になった皆さんの御霊を慰めるための慰霊塔です。明治時代の日清・日露戦争から第二次世界大戦までの戦没者405人の名前が銅板に刻まれ、内部に納められています。



芦屋町では、毎年8月16日に芦屋町戦没者慰霊町民盆踊り大会を中央公園で行っており、その際、芦屋町戦没者遺族会も戦没者慰霊祭を行い祈りをささげています。今年は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため慰霊祭と盆踊りは行われませんが、犠牲になられた戦没者の御霊に対し、一緒に心より哀悼の誠をささげましょう。